愛の足跡

秋山エマ
Emma C. Akiyama

選択の連続

ＪＣＣＮＣのメンバーの多くの方々はビジネスリーダーとして日々活躍されている。シリコンバレーやサンフランシスコという主要な経済圏に来られた赴任者はおそらくエリートコースを歩んでいらっしゃる組ではないだろうか。

当地の赴任を終えたあとは、ますます期待されるポストに着かれることだろう。これを読まれている読者の方の多くは、帰国後は役員になること、すでに役員の方は次は常務か専務か、、という要職への昇進を目指しているのではないかと思う。

私たちの毎日の生活は日々と選択の連続だ。自分のﾌﾟﾗｲｵﾘﾃｨが何かによって当然選択が違ってくる。業績を上げる以外に、会社内外の問題で厄介なことが頻繁におきる。プライベートでも頭を抱える問題もおきる。そうしたとき、自分のﾌﾟﾗｲｵﾘﾃｨが何かによって当然処理する方法も違ってくる。

自分の出世をないがしろにしてでも、正しいことをする、世のため人のためになることをする（勿論出世する道と相反する場合ばかりではないが）を選ぶのか、あるいはいつもながらの斬れる頭で、瞬時に自分にとって有利な方向を選ぶのか。処世術とは自分を手際よく守って人に面倒をなすりつける術も心得ていることでもある。

世のため人のためというと古臭いというか、生真面目な響きもあるので、言い方を変えると、自分の都合を選ぶか、あるいは、愛（自分より他の人が大切と思う気持ち）の道を選ぶか、という選択の連続だと思う。

立身出世

立身出世といえば、会社員の場合の最も成功した場合は会社の長、（代表者、社長）政治家であれば一国の長、日本ならば内閣総理大臣となることだろう。

日本では昔から男の子であれば「天下をとる」人が成功者という考えがあった。つまり、人を制するパワーをもつことが「偉い人」だ。

アメリカは今はまだ（2010年現在。あと20年先は不透明だが）一応世界最強の国という位置づけである。すると、世界一強い国で、一番パワーのある人＝大統領だとすると、アメリカの大統領は、世界で最も出世した人であるという考え方もできる。

ケースその１（最も出世した人）

80年代レーガノコミックスといわれる経済を生み大活躍したレーガン大統領。

彼は「俳優として成功し、その後カリフォルニア州の知事に当選、そしてアメリカ合衆国の大統領になった」。この「」1行のなかに凄まじい生存競争、出世競争に勝った生き様が見られる。例えば俳優志望者がどれだけ多いことか。そのなかで実際に俳優となり脚光を浴びるというのは相当の競争を生き抜いた人だ。またその後、選挙で票をとる、そしてついには政治の世界で自分を大統領に推薦させるまでいく、これは相当のやり手である。相当頭も良く、如才なく、政治力もあったという証拠だ。

そして、彼は「世界一出世した人間」になった。しかしそんなレーガン大統領もある時期から認知症となり、その過程で最愛の妻も子供さえも認知できなくなったと聞く。世界を制覇できたような人だが、最後にはそのパワーも意味がないものとなった。

ケースその２（最も出世しなかった人）

ある写真家が撮った写真集の１枚がその後ずっと脳裏にやきついてしまった。それはアメリカのホームレスの人が洪水で水に呑まれていく写真だった。その写真では白人の中年男性が、いとも無抵抗で目を閉じたまま、嵐で氾濫する水に呑まれていく瞬間をとらえたものだった。見た瞬間は、「こんな写真を撮っているヒマがあるならなぜ（写真家が）この人を助けなかったのだろう！」と憤慨したが、その後その写真家の訴えたかった大切なメッセージがじわじわと浸透してきた。

この一枚の写真はどれだけ多くの大切なメッセージを人々に伝えたことか。

このホームレスの人はおそらく競争社会で負けた人だ。もしかしたら、人に騙されて事業に失敗したのか。少なくとも処世術にたけていたとは思えない。

「人を騙すより騙される人間のほうが人間が上等だよ。」

有吉佐和子の小説に書かれていたこの言葉に感心したものだった。人に騙されるということは、人を信頼できる純粋な心があった人だ。これは確かに「人間として上等」だ。

(勿論、私たちは生きていく上で「知恵」ということも必要だから、「人を信頼する心」と「判断する知恵」両方必要ではあるが。)

このホームレス男性が無抵抗で目を閉じ、水に流されていく最後のとき彼は何を思ったのだろうか。

還る日に

出世といえばビジネスマンとして大成功した方として稲盛和夫氏があげられる。彼は京セラ、第二電電（現在のKDDI）というフォーチュン500企業を2社興し大成功させた。

私は稲盛氏が率いる盛和塾で勉強させていただいているが、塾長からは数々の貴重な学びを得ている。

最近の勉強会で見たビデオのなかで稲盛氏が述べた言葉を以下にご紹介したい；

「私は立派な京セラをつくった、KDDIも素晴らしい会社に育て上げた、稲盛財団を作り京都賞という世界的な顕彰事業も行っている；

死ぬ間際にそんなことをいろいろといってみたところでどうなるのでしょう。魂だけがあの世に旅立っていくのであれば其の旅立ちまでの間少しでも美しいものに磨いていくことこそ人生の目的ではないかと思うのです。」

これほど成功された人でさえ、還る日には京セラもＫＤＤＩも慈善事業も大きなことではない、と言われた。

先ほど出世例として挙げたレーガン大統領だが、彼は死期が迫ったとき、「ナンシーが妻であることさえわからなかった。しかしナンシーが部屋に入ると嬉しそうに笑顔になった。それをみて、父は母を本当に愛していたのだ、とわかった。」とご子息があるテレビ番組で語っていたのを思い出す。

脳が病に冒されたあと、彼のなかではどれだけの社会的な偉業をしたかなどは無意味だったと思う、しかし、愛の記憶だけは魂がしっかりと覚えていたのだった。

大統領という世界一出世した人と、ホームレスという全く出世しなかった人、この二人が還るとき、おそらく魂がもっていったものは全く同じではなかったのだろうか。

最後に

私はこのＪＣＣＮＣの月報に98年頃当時の杉浦事務局長に執筆を依頼されてから、他社ですでに出版されたものの再使用も含めるとおそらく通算で5、6年にわたり60、70本近いエッセイをお届けしたのではないかと思う。そして、これが私の最後のメッセージとなる。従って最後にＪＣＣＮＣ読者の方たちに一番伝えておきたかったことをエッセイにした次第だ。

働き盛り、自分の出世とお金が何よりも大切、これはオブラートにくるんで見えにくくしている人もいるが、本当のことをいうと殆どのビジネスマンが通りすぎるひとつの過程ではないだろうか。それは私たちのおかれている物質文明で、ある意味の生命力をも表していると思うのでそれ事態を否定する気持ちはない。

しかし、今これを読んでいる貴方にもある日、確実に還る日がくる。そしてそれは実はそんなに遠い日ではないのだ。

その日、自分の数十年の歩いてきた道を振り返り、くっきりと残って見えるのは ***愛の足跡*** だけではないだろうか。

With Love,
Emma

（今回からリレーとなりましたので、次号エッセイは、春木会頭に執筆をお願いしました。春木会頭、よろしくお願いします。）

秋山エマ　Emma C. Akiyama
1977年ベイエリアへ。
82年スタンフォード大学大学院卒業後(修士)、オックスフォード大学大学院経営学研究所へ。
東京、ニューヨーク、ロスアンゼルスで投資銀行業務、商業不動産投資コンサルティングを歴任後、東京の米国大使館で商務官として勤務。
93年にベイエリアに戻りビジネスコンサルティングを専門としたA.Media, Inc. を設立、その後、コンサルタントとして活躍。
ビジネス以外にもエッセイストとしてあらゆる雑誌、新聞などへ寄稿。また個人的にはクリスチャン伝道活動、動物愛護、其の他啓蒙活動に尽力している。　EmmaTokyo@aol.com